

Title	インドネシア語にみるアラビア語受動分詞からの外来語
Author(s)	森村, 蕃
Citation	大阪外国語大学学報. 39 p.253-p.265
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80673
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

インドネシア語にみるアラビア語受動分詞からの外来語

森 村 蕃

Kata-Kata dalam Bahasa Indonesia yang asalnya dari Passive Participles Bahasa Arab

Shigeru MORIMURA

Melalui agama/kebudayaan Islam bahasa Indonesia mengambil banyak kata Arab, baik kata-kata keagamaan maupun kata-kata umum. Besar sekali pengaruh bahasa Arab kepada perkembangan bahasa Indonesia, terutama dalam bidang pengambilan kata-kata. Ada kata-kata Arab yang secara langsung masuk ke dalam bahasa Indonesia, ada juga yang secara tak langsung masuk ke dalam bahasa Indonesia melalui bahasa-bahasa yang sudah dipengaruhi bahasa Arab seperti bahasa Parsi, bahasa Urdu dan lain-lain.

Dalam bahasa Indonesia terdapat kata-kata yang asalnya dari passive participles bahasa Arab. Bahasa Indonesia serempak kena pengaruh, baik dari bahasa Arab maupun dari bahasa-bahasa yang sudah dipengaruhi bahasa Arab. Jadi, sukar sekali dipastikan, dari bahasa yang mana kata-kata itu masuk ke dalam bahasa Indonesia. Tetapi, berdasarkan sebab-sebab yang diterangkan di bawah ini, dapat disimpulkan, bahwa kata-kata yang disinggung dalam karangan ini berasal dari passive participles bahasa Arab.

- a. Karakter kata dengan huruf Jawi biasanya sama dengan karakter passive participle bahasa Arab.
- b. Pada kata itu terdapat ciri bunyi passive participle bahasa Arab.
- c. Kata itu mempunyai fungsi/pemakaian yang sama dengan fungsi/pemakaian passive participle bahasa Arab, yaitu fungsi/pemakaian adjective dan nominal. Arti kata, yaitu arti adjective dan arti nominal, diturunkan dari arti kata passive participle bahasa Arab.

Kata-kata asing diambil bahasa Indonesia tanpa mempedulikan gender, number dan declension kata-kata asing itu. Di antara kata-kata dalam bahasa Indonesia yang asalnya dari passive participles bahasa Arab ada yang dipakai sebagai kata tambahan atau kata kerja selain dipakai sebagai kata sifat atau kata benda. Ada juga yang membentuk kata-kata turunan dengan imbuhan atau membentuk kata majemuk.

はじめに

インドネシアにイスラム教、イスラム文化が渡来するに及び、インドネシア語も著しい影響を受けた。

インドネシアにイスラム教が伝来したのは13世紀後半であるといわれ、スマトラ北部に初めて伝えられたという。しかし、それ以前にアラブ人が既に渡来していた記録もあり、もっと以前に伝来していたかもしれない。イスラム教は、15～16世紀にはインドネシア群島各地へ伝わる。インドネシアにイスラム教をもたらしたのは、アラブ人、ペルシア人、インド人であり、またトルコ人などの少数民族もいたという。イスラム教と共に彼等によってイスラム文化がもたらされた。イスラム教の布教は彼等の商業活動と結びつき、イスラム教は、最初、主としてスマトラ、ジャワ、カリマンタンの海岸都市の商人の間に広まったが、やがて商品の流通により内陸の方へと伝えられていった。コーランをはじめ、いろいろな宗教書がもたらされ、政治、経済、学問、文学、芸術などの各種の分野にわたる華やかなイスラム文化がもたらされた。言語の面で受けた影響では、とりわけアラビア文字が伝わり、非常に多くのアラビア語の語彙がインドネシア語にとり入れられていった。アラビア語から直接とり入れられたほか、ペルシア語、ウルドゥ語などのようなアラビア語の影響を既に受けた言語を経てインドネシア語にとり入れられたものもあろう。インドネシア語にとり入れられたアラビア語起源の語彙は各種の分野のものに及ぶが、とりわけ宗教関係用語がめだつ。回教徒にとってアラビア語は日常の宗教生活に於いて欠くことができない所以である。しかし、日常用語にも可成多くのアラビア語起源の外来語がみられる。

インドネシア語における外来語の研究に関する文献は、極めて少ない。インドネシア語にみるアラビア語受動分詞起源の外来語に関する文献は、残念ながら全く見当たらない。一般的に言って、インドネシア語における外来語の研究は未だ進んでいないようで、未開拓の分野であるといってもよいであろう。本稿で扱う「インドネシア語にみるアラビア語受動分詞からの外来語」とは、インドネシア語の外来語の中でアラビア語受動分詞に語源をたどることができる外来語のことであり、これまで自分なりに研究した結果、知り得たことをまとめたものである。

I

インドネシア語にみられるアラビア語起源の外来語は、文字言語（書き言葉）からとり入れられたものもあれば、音声言語（話し言葉）ないし方言からとり入れられたものもあろう。それらはアラビア語から直接とり入れられたものばかりであるとはいえない。ペルシア語、ウルドゥ語などのようにアラビア語の影響を受けた言語を経てインドネシア語にとり入れられたものもあろう。インドネシア語は、イスラム教、イスラム文化の渡来と共に、アラビア語から、またペルシア語、ウルドゥ語などのようにアラビア語の影響を受けた言語から、時期的にほぼ同じくして影響を受けたからである。インドネシアにイスラム教、イスラム文化をもたらしたのは、アラブ人のほか、ペルシア人、インド人、それにトルコ人などの少数民族であったし、彼等の通商、文化の領域における活躍はめざましいものがあつた。トルコ人などの少数民族の言語を経てアラビア語の語彙がインドネシア語にとり入れられなかったとは断言できないが、トルコ人などの少数民族の言語を経てとり入れられたものがあつたとしても、彼等は少数民族であつたがために、極めてわずかであつたにちがいない。だが、通商と布教のために多数訪れた回教徒のペルシア人やインド人の言語であるペルシア語、ウルドゥ語を経てアラビア語の語彙が可成インドネシア語にとり入れられたものもあることは見逃すことができないであらう。ペルシア人がインドネシアへやって来る以前、古くからペルシア語は多数のアラビア語の語彙を借用しているのであり、またウルドゥ語にもアラビア語の語彙がペルシア語を経て11世紀頃よりとり入れられている。インドネシア語の外来語の中で *saudagar* <商人>、*istana* <宮殿>、*syahbandar* <港湾長>、*nakhoda* <船長>、*permadani* <絨氈>、*pasar* <市>、*pahlawan* <英雄> などの語がみられるように、ペルシア語自体から通商、行政、文学などの分野にわたる関係用語が可成インドネシア語にとり入れられており、インドネシア語に対するペルシア語の影響も大きかった。

インドネシアにイスラム教、イスラム文化が渡来するに及んでアラビア文字が伝えられた。インドネシア語の音を表記するのに29のアラビア文字に更に5文字がつけ加えられ、これら34の文字はジャウィ文字 (*Huruf Jawi*) といわれる。5文字は ج , غ , ف , ي , پ であり、インドネシア語の音 /č /, /ŋ /, /p /, /g /, /j / を表記するためのものであつた。以後、近世に至るまでインドネシア語はこのジャウィ文字で表わされた。20世紀に至り、ラテン文字（ローマ字）がジャウィ文字にとって代り、現在、インドネシア語はラテン文字で表わされる。今日では、宗教関係書や古典インドネシア文学作品などにジャウィ文字をみる程度である。

ジャウィ文字で書き表わされたインドネシア語をみると、アラビア語に語源をたどることができる語彙の字形は、通常、アラビア語における字形と同じである。中にはジャウィ文字の表記法に従ったものもあるが、この場合もアラビア語における字形のものも存在する。例えば *fikir* (*pikir*) <考える> は、ジャウィ文字で فیکر , فیکیر などと書かれるほか、アラビア語の字形 فکر も用いられている。ペルシア語やウルドゥ語にとり入れられたアラビア語の語彙も、それぞれの言語の表記法に従っているとはいえ、それらの字形はアラビア語における字形と同じであるもの

が、普通、見出される。このように、インドネシア語にみられるアラビア語語彙のジャウィ文字による字形がアラビア語における字形と同じであること、またアラビア語の影響を受けた言語で、インドネシア語に影響を与えた言語であるペルシア語やウルドゥ語において、アラビア語起源の語彙の字形は、通常、アラビア語における字形と同じであることは、それらの語の語源をアラビア語にたどっていくのに役立つキー・ポイントとなる。本稿で取扱う外来語がアラビア語受動分詞に語源をたどることができるのも、ジャウィ文字（アラビア文字）による字形が、通常、同様であることが、まず有効な手がかりとなる。

次に、インドネシア語に見出されるところのアラビア語受動分詞に語源をたどることができる語をあげ、その次にアラビア語受動分詞とその語根（完了形、能動、第三人称男性・単数）をあげる。アラビア語受動分詞とその語根には便宜上、ローマ字による音の表記も示したが、この表記は Hans Wehr: A Dictionary of Modern Written Arabic edited by J. Milton Cown, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1961 の中の表記法に従った。例えば1.におけるインドネシア語 ma'bud <神>は、アラビア語受動分詞 معبود ma'būd <崇拜された;神>に語源をたどることができ、この受動分詞の語根が عبد 'abada <崇拜する>であることを示す。

1, ma'bud <神>

معبود ma'būd
عبد 'abada

2, mazkur <述べられた>

مذكور maḍkūr
ذكر ḍakara

3, mafhum <理解された;理解;理解する>

مفهوم mafhūm
فهم fahima

4, maglub <打ち負かされた>

مغلوب maglūb
غلب galaba

5, mahful <記憶された>

محفوظ maḥfūẓ
حفظ ḥafiza

6, mahmud <賞賛された>

محمود maḥmūd
حمد ḥamida

7, mahsul <産物>

محصول maḥṣul
حصل ḥaṣala

8, majemu(k) <複合の>

مجموع majmu'
جمع jama'a

9, majedub <とりつかれた>

مجنوب majḍub
جذب jadaba

10, makbul <受入れられた>

مقبول maqbūl
قبل qabila

11, makh(u)dum <主人, 宗教に通じ
た人に対する敬語>

مخدوم makdūm
خدم kadamā

12, makhluk <創造物>

مخلوق maklūq
خلق kalaqa

13, mak(e)ruh <非難すべき ; 悪行>

مكروه makrūh

كره kariha

14, maksud <意図>

مقصود maqṣūd

قصد qaṣada

15, maktub <書かれた>

مكتوب maktūb

كتب kataba

16, ma'kul <道理にかなった>

معقول ma'qūl

عقل 'aqala

17, maklum <知られた ; 了解する>

معلوم mā'lūm

علم 'alima

maklumat <通知>

معلومة ma'lūmat

18, makmur <栄えた>

معمور māmūr

عمر 'amara

19, mansukh <取消された>

منسوخ mansūk

نسخ nasaka

20, marhum <故……>

مرحوم marhūm

رحم raḥima

marhumah, marhumat <故(女性)…>

مرحومة marḥūmah

21, ma'ruf <知られた ; 善行>

معروف ma'rūf

عرف 'arafa

22, masygul, masgul <不安な>

مشغول mašgūl

شغل šaḡala

23, masyhur, mashur <有名な>

مشهور mašhūr

شهر šahara

24, masyuk <愛された ; 愛人>

معشوق ma'sūq

عشق 'ašīqa

25, ma'sum <免除された>

معصوم ma'sūm

عصم 'ašama

26, maujud <実存する>

موجود maujūd

وجد wajada

maujudat <実存する万物>

موجودات maujūdāt

27, maulud <(マホメットの)誕生日>

مولود maulūd

ولد walada

28, mazmur <聖歌>

مزمور mazmūr

زمر zamara

29, makzul, ma'zul <免職された>

معزول ma'zūl

عزل 'azala

30, majedub <とりつかれた>

مجدوب majdūb

جذب jadaba

31, maksum <分けられた>

مقسم maqsūm

قسم qasama

32, mal'un <呪われた>

ملعون mal'un

لعن la'ana

33, mantuk <真義>

منطوق mantūq

نطق naṭaqa

34, mahdi <指導者>

مهدي mahdīy

هدى hadā

35, magrur <うぬぼれた>

مغرور maḡrūr

غر garra

36, mahbub <かわいい ; 愛人(男性)>

محبوب mahbūb

حب ḥabba

mahbubat, mahbubah <かわいい ; 愛
人(女性)>

محبوبة mahbūba

37, majenun <(霊に)とりつかれた>

مجنون majnūn

جن junna

38, ma'mum <祈禱において祭司長によつ
て導かれた ; 祈禱において
祭司長に従う者>

مأموم ma'mūm

ام amma

39, mujar(r)ab <(薬が)ききめのある>

مجراب mujarrab

جرب jarraba

40, mujar(r)ad <抽象的な>

مجرد mujarrad

جرر jarrada

41, mukad(d)am <先行した ; 指導者>

مقدم muqaddam

قدم qaddama

mukad(d)amah, mukad(d)amat <序言>

مقدمة muqaddamah

mukadamin <先行した>

مقدمين muqaddamīn

42, mukaddas <神聖な>

مقدس muqaddas

قدس qaddasa

43, mukal(l)af, mukal(l)ap <回教法を实践
すべき成人>

مكلف mukallaf

كلف kallafa

44, mukar(r)am <尊敬された>

مكرم mukarram

كرم karrama

45, murakkab <構成された>

مركب murakkab

ركب rakkaba

46, muwak(k)al <代表>

موكل muwakkal

وكل wakkala

47, muazam <尊敬された>

معظم mu'azzam

عظم 'azzama

48, musabab^{註1}

مسبب musabbab

سبب sabbaba

49, mua(a)laf, mual(l)af <発行された ; 刊
行物>

مؤلف mu'allaf

ألف 'allafa

50, mubarak <恵まれた>

مبارك mubārak

بارك bāraka

51, mujahadat <回教を守る戦い>

مجاهدة mujāhada

جاهد jāhada

52, munajat <無言の祈り>

مُنَاجَاةٌ munājāh

نَاجِي nājī

53, munasabat, munasabah, menasabah

<合致した; 合致>

مُنَاسَبَةٌ munāsaba

نَاسِب nāsaba

54, musyarakah, musyarakat, masyarakat

<社会>

مُشَارَكَةٌ mušāraka

شَارِك šāraka

55, mutala'ah, mutla'ah <研究>

مُطَالَعَةٌ muṭāla'a

طَالِع ṭāla'a

56, mu(a) fakat, muafakah, mupakat <同

意の; 同意>

مُؤَافَقَةٌ muwāfaqa

وَافِق wāfaqa

57, musyawarat, musyawarah, mesuarat,

masyawarat <協議>

مُشَاوَرَةٌ mušāwara

شَاوَر šāwara

58, mut(a) lak <無条件の>

مُطْلَق muṭlaq

أُتْلِق 'aṭlaqa

59, mufrad <ただ一つの>

مُفْرَد mufrad

أَفْرَد 'afrada

60, murad <意図>

مُرَاد murād

أَرَاد 'arāda

61, mubah <(回教で)許されてもいいし,

禁じられてもいいし>

مُبَاح mubāh

أُبَاح 'abāḥa

62, mursal <(神の)使徒>

مُرْسَل mursal

أُرْسِل 'arsala

63, mukhtasar <大略>

مُخْتَصَر muḫṭaṣar

اِخْتَصَرَ iḫṭaṣara

64, muktabar, mu'tabar <尊敬された>

مُعْتَبَر mu'tabar

اِئْتَبَرَ i'tabara

65, muktamad, mu'tamad <信用のおける(人)>

مُعْتَمَد mu'tamad

اِئْتَمَد i'tamada

66, mujtama' <社会>

مُجْتَمَع mujtama'

اِجْتَمَعَ ijtama'a

67, muktamar, mu'tamar, mutamar <会議>

مُؤْتَمَر mu'tamar

اِئْتَمَرَ i'tamara

68, murtad <信仰を捨てた>

مُرْتَد murtadd

اِرتَد irtadda

69, mustahak <権利のある>

مُسْتَحَق mustaḥaqq

اِسْتَحَق istaḥaqq

70, mustajab <(薬が)ききめのある>

مُسْتَجَاب mustajāb

اِسْتَجَاب istajāba

上述のアラビア語受動分詞はほとんどすべてペルシア語にもウルドゥ語にもとり入れられていて、それらの字形はアラビア語におけるものと同じである。但し、アラビア語受動分詞 **مؤلف** *mu'allaf* は、ペルシア語、ウルドゥ語では **و** (Waw) の上の **ء** (Hamza) がない。

外来語とは外国語から自国語にとり入れられた言葉である。従って、その音形も自国語の発音の習慣にあわせられたものになっている。即ち、自国語の音素、音節構造、アクセントといった音組織の *Substratum* が働いているが、本稿で扱う外来語がアラビア語受動分詞に語源をたどることができる手がかりとなるのは、アラビア語受動分詞の型の音形の特徴が多かれ少なかれそれらの語にあらわれていることである。今、子音を C として、ローマ字でアラビア語受動分詞の型をあらわすと、まず三つの子音を語根とする単純動詞 (Simple Three-Radical Verb) の受動分詞の型は **maCCuC** である。上述の 1 から 38 までの語 (34 の語は別) はこの種の型の音形の特徴があらわれている。**maklumat**, **marhumah**, **mahbubat** はこの種の型に *Feminine Ending* **る**。(ローマ字による音の表記は **at**, **ah**, **a** など) が接合した型の音形の特徴があらわれているものである。三つの子音のうち、最初の子音が **و** (Waw) で始まる単純動詞の受動分詞の型は **mauCūC** であり、**maujud** と **maulud** にその音形の特徴があらわれている。**maujudat** には **majuḍ** の女性規則複数 **majuḍat** の音形の特徴があらわれている。34 の語 **mahdi** は *Weak Verb* の受動分詞の型 **maCCiy** の音形の特徴があらわれているものである。39 から 49 までの語には、派生動詞第二型の受動分詞の型 **muCaCCaC** がもつ音形の特徴があらわれている。**mukad(d)amāh** にはこの種の型に *Feminine Ending* が接合した型の音形の特徴があらわれているのであり、**mukadamin** は **muqaddam** の男性規則複数 **muqaddamīn** の音形の特徴があらわれているものである。派生動詞第三型の受動分詞の型は、**muCāCaC** であり、この型の音形の特徴は **munajat** を別として 50 から 57 までの語にみることができる。**mujahadat**, **munasabat**, **masyarakat**, **mutala'ah**, **mupakat**, **musyawarat** には、この種の型に *Feminine Ending* が接合した型の音型の特徴があらわれているものである。**munajat** には *Weak Verb* の派生動詞第三型の受動分詞の型 **muCāCāt** の音形の特徴をみることができる。派生動詞第四型の受動分詞の型は **muCCaC** とあらわされるが、この種の型の音形の特徴は **mutlak**, **mufrad**, **mursal** の語にみられる。**murad** と **mubah** には *Hollow Verb* の派生動詞第四型の受動分詞の型 **muCaC** がもつ音形の特徴があらわれている。派生動詞第八型の受動分詞の型は **muCtaCaC** であり、この型の音形の特徴は 63 から 67 までの語にみられる。**murtad** には *Doubled Verb* の派生動詞第八型の受動分詞の型 **muCtaCC** がもつ音形の特徴があらわれている。**mustahak** には *Doubled Verb* の派生動詞第十型の受動分詞の型 **mustaCaCC** がもつ音形の特徴があらわれているのであり、また **mustajab** には *Hollow Verb* の派生動詞第十型の受動分詞の型 **mustaCāC** がもつ音形の特徴があらわれているのである。

アラビア語の影響を受けた言語で、インドネシア語に影響を及ぼした言語であるところのペルシア語やウルドゥ語にみられるアラビア語受動分詞起源の外来語にも、アラビア語受動分詞の型の音形の特徴がよくあらわれている。今、**makhluk**, **maksud**, **makmur**, **marhum**, **marhumah**,

mujarrab, mutlak を例にとってペルシア語におけるローマ字による音の表記をみると, makhlūq, maqṣūd, ma'mūr, marḥūm, marḥūma(t), mujarrab, mutlaq であり, ウルドゥ語では makhlūq, maqṣūd, ma'mūr, marḥūm, marḥūmah, mujarrab, mutlaq となっている。^{註2}

更に本稿で取扱う外来語がアラビア語受動分詞に語源をたどることができる手がかりとなるのは, アラビア語受動分詞の持つ機能と同じ機能がそれらの語にみられることであり, またペルシア語, ウルドゥ語などのようにアラビア語の影響を受けた言語で, インドネシア語に影響を及ぼした言語にみられるアラビア語受動分詞起源の外来語にも, アラビア語受動分詞の持つ機能と同じ機能がみられることである。このアラビア語受動分詞の持つ機能とは, 次に述べるように, 文中, 形容詞としての機能であり, また名詞としての機能である。

元来, アラビア語受動分詞は, <～された, ～されている>という「受動的 (passive) な完了の状態」をあらわすのを意味特徴に有する。アラビア語受動分詞は, 文中にあらわれる位置によって, 形容詞としての機能を発揮する場合もあれば, <～されたもの (こと), ～されているもの (こと)>という意味をあらわす名詞としての機能を発揮する場合もある。例えば, 動詞 خلق kalaqa <創造する>の受動分詞 مخلوق maklūq は, <創造された>という意味をあらわす形容詞としての機能を発揮する場合もあれば, <創造されたもの>, 即ち<創造物, 生物>という意味をあらわす名詞としての機能を発揮することもある。また動詞 قصد qaṣada の持ついろいろな意味のうち, <意図する>を例にとれば, この動詞の受動分詞 مقصود maqṣūd は, <意図された>という意味をあらわす形容詞としての機能を発揮する場合もあれば, <意図されたもの (こと)>, 即ち<意図, 目的>という意味をあらわす名詞としての機能を発揮することもある。これらの機能によって, 形容詞としての機能を発揮する場合の受動分詞の意味 (語義) を「形容詞的意味」, 名詞としての機能を発揮する場合の受動分詞の意味 (語義) を「名詞的意味」とすれば, これらの品詞的意味を伴ってアラビア語受動分詞の語はインドネシア語にとり入れられ, またペルシア語, ウルドゥ語などにとり入れられ, またペルシア語, ウルドゥ語などを経てインドネシア語にとり入れられた。アラビア語受動分詞の語は, ペルシア語やウルドゥ語においても, 通常「形容詞的意味」を伴ってとり入れられたものは形容詞としての機能を発揮し, 「名詞的意味」を伴ってとり入れられたものは名詞としての機能を, また「形容詞的意味」と「名詞的意味」の両方を伴ってとり入れられたものは形容詞としての機能や名詞としての機能を発揮する (勿論, 他の用法もみられる)。アラビア語受動分詞の語がインドネシア語に直接とり入れられる場合, またペルシア語, ウルドゥ語などにとり入れられる場合, またペルシア語, ウルドゥ語などを経てインドネシア語にとり入れられていく場合, 中にはただ「形容詞的意味」を伴ってとり入れられたものもあるし, ただ「名詞的意味」を伴ってとり入れられたものもある。また「形容詞的意味」と「名詞的意味」との双方を伴ってとり入れられたものもある。但し, 外来語というのは原語の持ついろいろな意味の一部を伴ってとり入れられるのが普通であるから, 原語の「形容詞的意味」といっても, それらのすべてを伴ってとり入れられたわけではない。また原語の「名詞的意味」といっても, それらの

すべてを伴ってとり入れられたわけではない。また、ペルシア語、ウルドゥ語などを経てインドネシア語の中に入ったものの中には、ペルシア語、ウルドゥ語などの中で更に派生した意味を伴ってインドネシア語にとり入れられたものもあろう。また、インドネシア語に入った後、インドネシア語の中で新しい意味の派生が生じたものもあろう。

一般に、外来語の中には借入された時の意味では次第次第に使われなくなっていき、遂には、もはやその意味では使われなくなってしまうものがある。例えば、ポルトガル語の *bateira* から日本語に入った「バッチャ」という語は、＜小舟＞という意味で借入され、その意味で最初使われていたが、いつのまにか＜小舟＞という意味では使われなくなっていき、現在では、この語はもはやこの意味では使われなくなり、＜小舟＞から派生した＜押しずし^{註3}＞の意味で使われている。インドネシア語にみられるアラビア語受動分詞起源の外来語にも、こういった語が中にある。例えば *mujar(r)ab* という語はアラビア語受動分詞 *مُجَرَّب* *mujarrab* を語源とする。アラビア語動詞 *جَرَّب* *jarraba* ＜試す、試験する＞の受動分詞が *مُجَرَّب* *mujarrab* ＜試された、試験された＞で、この受動分詞はペルシア語やウルドゥ語にもとり入れられた。インドネシア語の *mujar(r)ab* は、今日では＜試験された、試験済の＞といった意味ではもはや使われなくなり、＜(薬が)よくきく、ききめのある＞という意味で使用されている。

インドネシア語にみるアラビア語受動分詞に語源をたどることができる外来語は、インドネシア語において、文中いかなる機能を果たすかをみると、やはり「形容詞的意味」を伴ってとり入れられたものは形容詞としての機能を発揮するのであり、「名詞的意味」を伴ってとり入れられたものは名詞としての機能を発揮する。また「形容詞的意味」と「名詞的意味」の双方を伴ってとり入れられたものは、形容詞としての機能や名詞としての機能を発揮する。

a, 名詞としての機能の例

Manusia adalah makhluk yang mempunyai akal budi.

＜人間は知能を持つ生物である。＞

Apakah maksud mereka? ＜彼等の意図は何ですか。＞

(Al) marhum Dr. Hartono dan (al) marhumah Ibu Susilo berjasa besar kepada negara kita. ＜故ハルトノ博士と故スシロ女史は、我が国に偉大な貢献をした。＞

b, 形容詞としての機能の例

Di Eropah banyak sekali negara makmur.

＜ヨーロッパには繁栄した国家が非常に多い。＞

Dalam kalimat - kalimat ini terdapat beberapa kata majemuk.

＜これらの文章にはいくつかの複合語がみられる。＞

Negara itu makmur. ＜その国家は繁栄している。＞

このように、アラビア語受動分詞本来の文中における形容詞としての機能及び名詞としての機

能が本稿で取扱う外来語の機能にみられる。そして、語義として持つところの「形容詞的意味」や「名詞的意味」は、アラビア語受動分詞の〈～された、～されている〉という意味特徴が出发点となっているものである。

II

インドネシア語にみるアラビア語受動分詞に語源をたどることができる外来語も、性、数、語形変化にこだわりなくとり入れられている。インドネシア語の外来語一般について言えることは、インドネシア語は外国語の名詞の性、数、語形変化にこだわりなくとり入れていることであり、また形容詞についても語形変化にこだわりなくとり入れていることである。アラビア語受動分詞に語源をたどることができる *makhluk* 〈生物〉, *maksud* 〈意図〉, *marhum* 〈故〉などは、アラビア語やウルドゥ語において文法上の性は男性であり、*masyarakat* 〈社会〉, *mupakat* 〈同意〉, *musyawarat* 〈協議〉, *marhumah* 〈故〉などはアラビア語やウルドゥ語における文法上の性は女性である。またオランダ語からの外来語を例にとれば、*dokter* 〈医者〉, *trem* 〈電車〉は男性名詞 *dokter* 〈医者〉, *tram* 〈電車〉から借入されたものであり、*pena* 〈ペン〉, *kamar* 〈部屋〉は女性名詞 *pen* 〈ペン〉, *kamer* 〈部屋〉から、また *buku* 〈本〉, *kantor* 〈事務所〉は中性名詞 *boek* 〈本〉, *kantoor* 〈事務所〉からそれぞれ借入されている。やはりオランダ語からの外来語である *politikus* 〈政治家〉, *politisi* 〈政治家たち〉は、前者は単数名詞 *politicus* 〈政治家〉から、後者はその複数形の *politici* 〈政治家たち〉からそれぞれ借入された。*hadirin* 〈出席者〉はアラビア語 *حاضرین* *ḥaḍīrīn* に語源をたどることができ、*حاضر* *ḥaḍīr* の男性規則複数をあらわす語形変化形である。アラビア語受動分詞に語源をたどることができる *mukadamin* 〈先行した〉も、元来、アラビア語では受動分詞 *مقدم* *muqaddam* の男性規則複数の語形変化形である。

インドネシア語にみるアラビア語受動分詞に語源をたどることができる外来語の中には、*alma'bud* 〈神〉, *almaktub* 〈聖典〉, *almarhum* 〈故〉, *almarhumah* 〈故〉, *almahdi* 〈メシヤ〉のように、アラビア語の定冠詞 *ال* *al* が受動分詞の語についた形でとり入れられたものもある。

アラビア語受動分詞起源の外来語は、インドネシア語において形容詞としての機能や名詞としての機能を発揮するのであるが、中には更に副詞としての機能を発揮したり、副詞句を作ったりするものもみられ、また次の *mafhum*, *maklum* の例にみられるように、更に動詞としての機能を発揮するものもみられる。つまり、副詞としての語義や動詞としての語義を併せ持つに至っているものがある。

Penduduk di pulau itu hidup makmur. 〈その島の住民は豊かな暮らしをしている。〉

Syarat-syarat itu harus diterima dengan mutlak. 〈それらの条件は無条件に受入れなければならなかった。〉

Surat orang muda telah kami terima dan mafhum kami apa isinja. 〈あなた (orang muda —

主人公 Zainuddin のこと)のお手紙を我々は受取りました。そしてその内容がわかりました。＞
(Hamka ; Tenggelamnja Kapal van der Wijck, Tjetakan ke-4, Djakarta, 1951. p.106)

Ia sudah mafhum isi buku itu. <彼はその本の内容を理解した。> (John M. Echols. Hassan Shadily; An Indonesian-English Dictionary, Second Edition, New York, 1963. p.231)

Kita telah maklum, bahwa desa adalah pusat masyarakat tani. <我々は、村落が農民社会の中心であるということを知った。> (Ir. Kaslan A. Tohir; Sekitar Masalah Pertanian Rakjat, Djakarta, 1953. p.16)

インドネシア語において、アラビア語受動分詞起源の外来語は、更にそれに接辞が接合されて派成語を形成するものもある。例えば maksud に接頭辞が接合されたのが bermaksud <意図する>であり、また masyhur に接頭辞と接尾辞が接合されて形成された派成語は kemasyhuran <名声>, memasyhurkan <有名にする>である。また mupakat に接頭辞が接合されて形成された派成語は semupakat <合意している>, bermupakat <相談する>であり、接頭辞と接尾辞が接合されて形成された派成語は memupakati <同意する>, memupakatkan <相談する>, permupakatan <相談 ; 同意>, kemupakatan <同意, 一致>である。

また古い形であるが, hasil mahsul <産物>のように、アラビア語受動分詞に語源をたどることができる mahsul <産物>が hasil <産物>と合わされて複合語となったものもみられる。

おわりに

本稿で取扱う外来語の音形の特徴、ジャウィ文字（アラビア文字）による字形、用法、意味に關することは、それぞれ相關連して本稿で取扱う外来語の語源をアラビア語受動分詞にたどる手がかりになるが、インドネシア語は、イスラム教、イスラム文化の渡来と共に、アラビア語から、またペルシア語、ウルドゥ語などのように既にアラビア語の影響を受けた言語から、時期的にはほぼ同じくして影響を受けた結果、本稿で取扱う外来語も、アラビア語から直接とり入れられたのか、またアラビア語の影響を受けた言語を経て間接的にとり入れられたのか、原語を求めるということになると困難である。

言葉の中には時がたつにつれて使われなくなってしまう言葉、所謂廃語があるが、特に外来語は栄枯盛衰がはげしい。インドネシア語にみるアラビア語受動分詞に語源をたどることができる外来語にも、上述のもののほかに、インドネシア語にとり入れられていたにもかかわらず、既に廃語となってしまったものがあるかもしれない。上述のものの中にも次第次第に使われなくなっていくものもあるが, majemuk, makhluk, maksud, maklum, makmur, marhum, marhumah, masyhur, muja(r)ab, masyarakat, mupakat, musyawarat, mutlak などは現在もよく用いられるものである。

〈註〉

註1. musabab はアラビア語動詞 سبب sabbaba <引起す>の受動分詞 مسبب musabbab <引起された; 結果>に語源をたどることができるが、インドネシア語では sebab musabab <原因>としてみられる。この sebab musabab は、アラビア語 سبب sabab <理由>に語源をたどることができるところの sebab <理由>に musabab が組合わされて複合語となったものと考えられるし、またアラビア語 السبب والمسبب <原因と結果>が起源で、このうち定冠詞 ال al が二つ、及び接続詞 و wa がそれぞれ脱落した形であるとも考えられる。

註2. F. Steingass, ph. D.; A Comprehensive Persian-English Dictionary, Third Impression, London, 1947.
及び Ferozsans; Urdu-English Dictionary, First Edition, Karachi, 1960. を参照。

註3. 矢崎源九郎; 日本の外来語, 東京, 1966. p.7 参照。

〈主要参考文献〉

Drs. Umar Junus; Sedjarah dan Perkembangan kearah Bahasa Indonesia dan Bahasa Indonesia, Djakarta, 1969.

Oemar Sastradiwiry; Edjaan Bahasa Indonesia Dengan Huruf Arab, Djakarta, 1954.

Muhtarun; Peladjaran menulis dan membatja Huruf Arab – Indonesia untuk S. M. U. P. & S. M. U. A. Bag. Sastera S. G. & S. G. A., Yogyakarta, 1951.

H. C. Klinkert; Nieuw Maleisch-Nederlandsch Woordenboek met Arabisch Karakter, Vijfde Druk, Leiden, 1947.

M. B. Lewis; A Handbook of Malay Script, London, 1958.

A. Teeuw; A Critical Survey of Studies on Malay and Bahasa Indonesia, 's-Gravenhage, 1961.

A. S. Tritton, D. Litt. ; Teach Yourself Arabic, London, 1967.

David Cowan; An Introduction to Modern Literary Arabic, London, 1975.

De Lacy O'leary, D. D.; Colloquial Arabic, London, 1951.

Frayha, Anis; The Essentials of Arabic, Beirut, 1958.

Ann K. S. Lambton; Persian Grammar, London, 1953.

John M. Echols, Hassan Shadily; An Indonesian-English Dictionary, Second Edition, New York, 1963.

W. J. S. Poerwadarminta; Kamus Umum Bahasa Indonesia, Tjetakan ke-tiga, Djakarta, 1961.

Prof. Drs. S. Wojowasito, W. J. S. Poerwadarminta; Kamus Lengkap, Tjetakan ke-II, Djakarta, 1972.

E. Pino, T. Wittermans; Kamus Inggeris II, Indonesian-English Dictionary, Second Edition, Djakarta, 1955.

Hans Wehr; A Dictionary of Modern Written Arabic Edited by J. Milton Cowan, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1961.

F. Steingass, ph. D.; A Comprehensive Persian – English Dictionary, Third Impression, London, 1947.

Ferozsans; Urdu – English Dictionary, First Edition, Karachi, 1960.

榎 垣 実; 日本外来語の研究, 東京, 1975

新 村 出; 外来語の話, 東京, 1976.

池 上 嘉 彦; 意味論, 東京, 1975.

矢 崎 源九郎; 日本の外来語, 東京, 1966

国 広 哲 弥; 意味の諸相, 東京, 1970

黒 柳 恒 男; ペルシア語入門, 東京, 1973.

高 津 春 繁; 比較言語学, 東京, 1950.

服 部 四 郎; 言語学の方法, 東京, 1967.

H. C. Klinkert; De Pelandoek Djinaka of het Guitige Dwerghert, Leiden, 1893.

J. S. A. van Dissel; Hikajat si-Miskin, Leiden, 1897.

Hamka; Tenggelamnja Kapal van der Wijck, Tjetakan ke-4, Djakarta, 1951.

Ir. Kaslan A. Tohir; Sekitar Masalah Pertanian Rakjat, Djakarta, 1953. etc.